

学生、 離島・飛島で考える

特集 2

—二年間の参加と考察—

今号と次号に掲載する「学生、離島・飛島で考える—二年間の参加と考察—」は、(一) 吳尚浩講師による二〇〇一、二〇〇二年度に行われた公益自由研究の夏合宿、(二) NPO法人パートナーシップオフィス(酒田市)が運営事務局となり、山形県庄内総合支庁、酒田市、酒田海上保安部、酒田航路標識事務所、NPO法人庄内海浜美化ボランティア、東北公益文科大学が協働して開催した第二回飛島クリーンアップ作戦(二〇〇二年七月七日実施、当時一年生の井村未来さんが実行委員長、学生・教員約五〇名、その他市民等二五〇名が参加)、(三) 学生と教員のサークル活動である「森づくりサークル」が行った、学生企画の島の未来を考える島民座談会(二〇〇二年八月九日)と酒田市から委託の「山形県離島振興計画案基礎資料作成のための調査」(二〇〇二年十二月下旬)に、本学学生が参加しての感想をまとめたものである。

学生、 離島・飛島で考える

—二年間の参加と考察—

心の栄養剤を提供してくれる島

堀米 裕子

私の飛島体験は、呉尚浩先生が指導される公益自由研究や森づくりサークルに属する学生たちの調査、クリーンアップ作戦などの環境保護活動に関わるものです。

飛島・離島は、私の大学生活にとって大きな位置を占めるものになりました。公益大に入学してから、入学前には予想もしていなかった体験をずいぶん積みましたが、飛島体験もその一つでした。

これまで私は四度飛島に行きました。初めて行ったときは、クリーンアップ作戦を行うにあたっての道の確保が目的でした。公益大に入る前から旅行ガイドブックなどによく掲載されていたため、飛島は一度行ってみたい場所だったのですが、実際に行ってみたら、イメージしていたものとはだいぶ違っていました。

実は観光のためのリゾート地かと考えていました。ところが、そうではなく、何がなのかはよく分からないけれど、

ん。私は環境面からの視点でしかクリーンアップ作戦のことを見ていませんでしたが、社会面の問題も起こりうるということからひとつだけにとらわれることのない目を養っていかねばいけないのだと感じました。そういった点で今回は社会勉強ができてよかったです。

三度目に行ったのは、三泊四日の飛島合宿でした。飛島にはもう二回来ていましたが、飛島全体を廻ることはしなかったため改めて飛島には不思議な力が宿っていることを感じました。神社や賽の河原など、その場にある独特の空気や不思議感あふれるものをたくさん見ることができました。多くのものや場所がありました。何か分からないけれど時間の流れがやけに遅いような、空気がすごく濃いような気分になった場所がありました。

そんな空気を感ぜると、自分に何か大切なものを忘れてはいないかを、その場所で問いかけてられているような気がしてすごく考えさせられました。私は単純で頑固な性格なので、人と人との関わりはどこか私だけ根本的な何かを、自分の性格には欠いてしまっていることに悩んでいました。だからといって、それが何なのかはわからず、友達が増えたけれど、その一方で大切な芯の部分が空洞になっている気がして混乱した状態だったため、すごく落ち着かせてもらったのです。

四度目にいったときも同じように知らない場所に行きま

すごく落ち着く空気を感ぜました。時間の流れがとにかく穏やかで、緑が豊かなところでした。本当の自然というのはこのことを言うんだな、と本当にのんびりしました。飛島の自然が大好きになりました。

二度目に行ったのは、七月七日のクリーンアップ作戦当日でした。私は環境に関することに興味があるので、クリーンアップ作戦のときは調査班として、岸へたどり着いた漂着物を調べました。外国からのごみがこのきれいな飛島にこんなに多くあったのかと衝撃を受け、日本のごみならまだしも外国からのごみで汚されているなんて、その国はいったいどうなっているのだと思いました。

しかし、漂着ごみについて勉強をしていくうちに、日本のごみによって多くの国が悩まされていることを知りました。もしこのことについて双方の国に情報がなかったとしたら、場合によっては国と国との社会問題になりかねませ

した。そして空気の違う場所について、また「しっかりと」といわれているような気持ちにさせてもらいました。そのときも混乱することが前にも増して重なっていたときだったので、自然に、飛島の人に、そして空気に癒され、心を落ち着けることができました。

私は飛島というところは心のビタミンを沢山くれる素晴らしい場所だと思っています。飛島に住んでいる方々との交流をしてさらに思ったことは、何か皆さんがあつてい心をもっているということでした。お話を何名かに伺ったのですが、皆さん丁寧に答えてくださって、自分の信念があり、生きるこの大切さを私たちなんからよりずっとずっと多く知っているように思いました。それは飛島という神秘に満ち溢れる島から与えられ続けてきたなにかを持っているからではないかと思えます。

たった四回しか飛島に行ったことのない私ですが、行くたびに自分が強くなっている気がしています。そして優しい気持ちにさせるような緩やかな空気は、いつも私の思考や意欲を支えてくれます。これからも飛島のことをもっともっと知っていき、自然と空気と人の素晴らしさ、そして都会では考えられない生活のあり方を学んでいきたいと思っています。

(東北公益文科大学学生)

学生、 離島・飛島で考える

—二年間の参加と考察—

飛島の生物探検と海の色

佐藤 翠

私が初めて飛島に行ったのは、去年の夏、六月の終わり頃のことだった。

飛島は本当に島だった。酒田から見ても、地図で見ても、船でだんだん近づいていっても、飛島は小さい島だというイメージがあった。それなのに空も海も林もみんな大きくて、あまりに視界が広がっていて驚いた。他から眺めるのと、実際その上に立って眺めるのでは差がありすぎた。飛島では、私は自分の五感をすべて使っているのを感じることができた。

私は飛島についてはほとんど知らないことばかりだった。大学に入るまで酒田で暮らしてきて飛島について得た知識といえば、県内唯一の離島だということ、酒田市に所属しているということくらいだ。だからといって飛島についてくわしく調べようとか、訪ねてみようとは考えなかった。第一、飛島に興味がなかった。けれど、飛島に行くと決めてから漂流ゴミのことやタブの原生林などの話を聞いて、自分でも海流や植生のことなどを調べてみた。

料に載っていた自分たちの調べたい貝類やイソギンチャクなどの生物はすぐに見つかり、その様子や動き、生息場所の状態などを観察できるはずだった。ところが、その様子を観察どころか、姿を見ることがさえできなかった生物もいた。鳥類はそう簡単に見つけることはできないと思っていたが、水生生物なら島を囲む浜辺を一周もすれば見つかると思っていた。自分の考えが甘かったのだ。

結局、最初に目的としていた飛島の生態系ピラミッドの作成はならず、姿を見つけた生物とその場所を島の地図と重ねてまとめるのが精一杯だった。初めて行く場所でも、しかも生物が相手の調査を、計画どおりに進めることが難しいのは当たり前だ。綿密な計画を立てるより、その時起こったことをどのように対処してまとめていくかのほうが重要だとわかった。

島の歴史や漁業の話を知っていると、飛島の生活はかなりの海に依存していることがわかった。さらにクリーンアップ作戦や離島振興計画などの話も進むと、これからは酒田市もどんどん飛島に関わるようになって、飛島の他への依存度がますます上がるのではないかと思った。現に島の西側の海が漂流ゴミによって汚染されてきている。こういう依存が強い所ほど汚染や被害も集まってしまっているのではないかと心配になるところだ。

しかし、島の人たちは漁業でやっていけるとか、けっこう裕福だとか、自立しているということを暗に私たちに示していたようだった。案内地図や旅館、お土産などの派手

すると何故だか、これは行かなくてはいけないと思った。こんな機会がなければ自分から進んで飛島に行くことなんてありえないと思ったのかもしれない。それよりも今思えば、純粹に自分の目で見てみたかったのだろう。飛島という島を知ってみたいかった。そのためには目から情報を入れるのが一番はやい。そのうえ実際行ってみれば、目だけでなく、手や足や耳からも感じるができる。

私は合宿では生物班として島に棲む生き物を調べ、観察した。主に鳥類と海岸沿いの水生生物を観察した。飛島は寒流と暖流の両方から影響を受け、そのため他にはない特殊な環境を持っている。その環境によって選ばれた生物が、暖地系、寒地系が入り混じった状態で生息している。これは資料で調べれば分かることなのだけれど、その資料に載っていたことがどうして分かったのかといえば、やはり島の植生や生息している生物を調べたからだ。その調査がいかに大変だったか、この合宿で少しはわかったつもりだ。もらった島の地図をみても、島の大きさからみても、資

なぐらいの観光アピールから考えてもそれは明らかだ。たしかに飛島にあるものは、驚いたり、不思議に思ったり、和んだり、何らかの形で感情を動かすものばかりだ。ただ多くの人たちにその魅力を知らしめるだけの力や動きがなかっただけだ。島の人たちの前向きなところが少しでも感じることができて良かった。

飛島にいた間は、今まで見たことがないものを見ると好奇心が沸いてきて、もっと見たいもっと知りたいという気持ちになる。その連続だった。飛島には、来た人に来て良かったと思わせる雰囲気がある。飛島から帰ってきてひとっだけ後悔したことがある。色鉛筆で絵を描けば良かったということだ。

私は飛島で海や浜をいくつかスケッチをした。描いている間は、色は目に焼き付けておけばいつでも思い出せると思っていた。けれど、私は海を見るのが好きで、しょっちゅう酒田の海を見に行っているせいか、飛島の海の色を忘れてしまった。酒田の海とは明らかに違う色をしていたことは思い出せるのだけれど、その違う色を納得できるほどには明確に思い出せないのだ。何と不思議なことだろう。

スケッチで飛島の景色を切り取ることはできなかった。今度飛島に行く機会があったら、必ずスケッチに色をつけてみようと思う。

(東北公益文科大学学生)

学生、 離島・飛島で考える

—二年間の参加と考察—

私を変えた飛島

飯川 忠

夏に行われた飛島クリーンアップ作戦。飛島に漂着したゴミの一齐清掃活動の名称だ。私はある用事からこの活動には参加しなかった。だが用事がなかったにしても、その当時、飛島に大した関心がなかった私は、参加しなかったかもしれない。

その後、先輩や友達でクリーンアップ作戦に参加した人から、「大変だったけど、とてもやりがいがあった」「また頑張りたい」という声を何度か耳にした。そんな話を聞き、自分もこの活動に参加していれば何か変わっただろうか、新しい発見ができたのだろうか、と思うようになった。

「大学生活の中で、いろんなことを体験して自分の視野を広げてみよう。目に見えない真理や論理、空間や社会を見つけてみよう」と、入学当初の私は考えていた。

だが、いざ実行というときには、その場面を見過ごすことが多かった。「このままでは自分を変われない。きつ

くは自分で見つける。」そう言い聞かせ、私は呉尚浩先生の公益自由研究を受講した。今思えば、それが私の転機だったかもしれない。

季節も冬に入ったころ、酒田市から大学に「離島振興計画案作成のための基礎調査」をお願いしたいとの話があった。飛島の未来をどう考えていくか、よりよい地域づくりのためにはどのような対策をとるか、といった内容のものだ。飛島が取り上げられた今回、私はこのプロジェクトに参加した。夏行けなかった分、こちらで挽回しようという気持ちも多少ながらあった。

十二月二十三日～二十五日の日程で私は飛島に渡った。到着して一番に感じたことは、今こは「島」という雰囲気をもじらしていることだった。うまく言葉で表現することはできないが、田舎に帰ってきたような気持ちとよく似ていた。そして次に強く思ったこと、それは若者がいな

いということだ。働いている、あるいはすれ違う人たちは皆五十代～六十代位の年齢層だった。資料などでわかっていたが、実際に来て目で見て、ショックだった。

話を聞くと、若い人たちは酒田などの町へ家を構え、そこで生活しているらしい。飛島の学校も生徒が少なくなり、休校という話を持ち上がってきた。呼び戻すと言うと簡単だが、教育現場や就職等の問題があり、一筋縄ではないかないうだった。

しかも現在では観光客の減少や、一口アワビの養殖をやめるといった問題も挙がってきている。そして島の裏側にあたる海岸線には、多くのゴミが打ち上げられていた。クリーンアップ作戦で拾いきれなかったゴミ、そして新たに漂着したゴミの山だ。中にはハングル文字の袋なども見られ、それらはロシア、朝鮮半島、中国などから流れ着いたのだという。

私が思っていたよりも、飛島は過酷な状態に陥っているようだったが、島民の人はどこかいきいきしているように見えた。外見とは裏腹に若者に勝るとも劣らない活力が感じられた。ある人は、飛島を第二の人生の場所としてとらえている。ここは人生の楽園なのだ。

その時私は飛島の人たちがなぜ生き生きと仕事に励んでいるのか少しわかってきたように思った。確かに島民全員がそうだというわけではないが、漁業でも農業でも懸命

に働いているからこそ、人生を楽しんでいるからこそ、この飛島が楽園に思えるのだということ。

このプロジェクトで、自分が本当に変わったかどうかはわからないが、他では味わえない、貴重な体験を自らの身体で感じ取れた。多くの島民に触れ合っ、その目で島や建物、そして自然を見つめて得られたものが数多くあった。そして、今の私や社会に足りないものが、少しではあるが見えてきたような気がする。うまくは説明できないが、情性や流れに任せるだけでの生き方とは反対の、何か前向きなものだ。

それは私の力だけで得られたものではない。呉尚浩先生はじめ、このプロジェクトに関わった仲間、飛島の人たちとの交流があったからこそ、見出したものである。

『百聞は一見にしかず』

飛島、そして公益大の中で私が学んだ言葉や知識や論理。聞くよりも自身の体で感じることによって見えてくるもの。いろいろあった。しかし、もつと自分が変わる可能性を見つけたせる体験、それが私の飛島へ渡つての大きな収穫であり、これからの大きな課題である。

（東北公益文科大学学生）

学生、 離島・飛島で考える

—二年間の参加と考察—

知恵の息づく島・飛島

五十嵐知佳

夏合宿の最後のミーティングで言った自分の感想を今も覚えている。それは、「島民の皆さんは一所懸命に生活していると感じた。」というものである。しかし、何故、そう感じたか、あのときの私には説明できなかった。

夏合宿では、島民の方々に時間を作っていたが、島民と学生がお話し合いをする機会を持つことができた。お話を聞き、また、ふれあう中で、私には、一所懸命に生活していらつしやる島民像がみえてきたのである。

島では、大部分の人々が漁業で生計を立てている。そのためか、私がお会いした人たちは漁業をしている人が多い。長年、漁業を営んでこられた皆さんの姿は、今までに私が見たことが無いほど、たくましく、味わい深いものである。味わい深いというのは、今までの漁業の様々な経験が、その姿からにじみ出ているという感じである。

そんな皆さんが、海の波の高さを見ながら、漁に出て行

それを聞いて、島の生活は不便だろうと感じた。島では、食料品を一週間分ぐらい買いただし、酒田から船で運ぶそうです。それを自宅の冷蔵庫に蓄えて置くのです。

また、船は、波の荒れ具合によって、欠航することもある。交通手段は不安定です。そこには、天候と海と切り離せない生活があります。このような話を聞き、自分の生活にあてはめては、島での生活は不安定だろうと思いつながら、島を後にした。

半年ぶりの飛島。冬合宿である。久しぶりに飛島班の仲間が集まり、嬉しかった。島民は、冬の寒さなど何処吹く風というような様子で、漁で採れたイカをさばいたり、朝仕事で採ってきたというのりを平らにして干す仕事をしていった。仕事をしている人たちの姿にはまたしても、たくましさを感じられた。今回も、島民のお話を聞く機会があり、さらに、島の生活について知ることができた。

その頃は、クリスマス前の時期で、もう、ケーキが用意されている家もあった。島では、一週間前から、クリスマスのために、ケーキを用意しておくそう。船が欠航した場合のことも、考えてのことである。

また、本や雑誌などは、インターネットで注文して送ってもらうそう。毎月買っている本は、その都度、届くという。これは、ほんの一例であるが、夏合宿のときに聞いた生活の様子や、今回のことから、島民が先を見越して生

く。現在は、今までの魚介類の採りすぎで、その数が減っているという。そんな中で、漁師の皆さんは、当然漁業を生業として生活している。そのほかの人たち、また漁業をしている人たちでも、畑で、野菜を作っている。ゴドイモ（飛島ではジャガイモのことをこう呼ぶ）、ナス、枝豆…と多種の野菜を栽培している。

このようなことからわかるように、島民の食卓には、自分たちの手によって、採られたもの、作られたものが、並ぶのである。それを知ったとき、それらが、スーパーマーケットで簡単に手に入る私たちの生活との違いに気づいた。その違いが、私が以前、「一所懸命に生活している」と感じたわけなのだと思う。そして、私がそう感じたわけには、「きっと、島民の皆さんは不便を感じながら生活しているのだろう」という私の考えもあったからだと思う。

島民とお話し合いでは、主に生活についてお聞きした。

活しているということがわかった。夏合宿で不便だろうと思つたようなことも、実は、島民の知恵や、工夫によって島民の生活に合わせてなされているため、不便ではないのだろう。もしも、今の私が島で生活することになったら、今の島民の皆さんのように先を見越しての生活などできないだろうと思う。

この二度の合宿を通して、島民の生活には、まわりの環境に適した生活の知恵が、各家々に生きていることを知った。私が夏合宿のときに感じた「一所懸命」というのは、私がそう感じているだけで、島の皆さんは感じていないかもしれない。冬合宿でみた島民の純朴な姿は、私にそう思わせた。むしろ、島にいながらにして、本を注文できるようになったことは、便利なことだ。

次の三度目は、厳しい離島の生活で身につけた、より味わい深い生き様、考え方をうかがいたいものだ。

(東北公益文科大学学生)



学生、 離島・飛島で考える

—二年間の参加と考察—

タブの森を愛する離島案内人

相良 聡

「何これ？」これが、ニュー飛島から飛島付近の海を見た時思ったことだ。それは、出港した酒田の海とのあまりにも大きな違いに驚いたからだ。そこには青く澄んでいる海が広がっていた。その海を見た時「本当にここは酒田か？」と思ったのと同時に、飛島への期待がさらに高まってきた。

飛島に到着。「うあー何もねー」と飛島への期待が少し下がった。こんなことを考えていると、ある男の人が「飛島は海だけだ」といった。

船が着いたところから飛島一周に出発した。まず海水浴場があった。先ほど船からみたものと同じ青く澄んだ海とたくさん岩がマッチしていて、まさにテレビでしか見たことがない世界が広がっていた。俗に言うサンゴの海のように感じた。そして、岩の脇の道を通り海沿いを歩いて行く。上を見るとハイビヤクシンというヒノキ科の低木が見

える。この木は飛島が生息の北限という説明があった。それを見ながらどんどん道を進んで行く。

岩の脇の道が終わり、今度は賽の河原といわれるところに到着する。ここは小児が死んでから苦しみを受けるところ。冥土の三途の河原のことで、細かい石がつまれて塔のようなものがあつた。この積んである石を取ってはいけなと言われているらしい。そう言われるとかえって取りたくなるのが人間の心情というものだ。

今度はちよつとした山道に入って行く。まず、明神の社というところでお参りをする。この後に行つたところが飛島で私の一番印象に残つたところであつた。

始めに言い忘れたが、この飛島の旅は、大学一年の夏、自由研究の一環として行つたもので、三泊四日のグループ、二泊三日のグループ、一泊二日のグループにわかれて行つた。私はこの企画の実行委員の一人で、二日目にくる残り

の学生を案内するため庄内総合支庁森林整備課の梅津勤一さんに案内してもらいながら他の実行委員と下見をしていたのだ。

私にとつて一番印象に残つたところは、明神の社のすぐ後ろにあるタブの林である。タブの林といっても普通ではない。下からこのタブの林の上を見る。枝がまるでパズルのように入り組んで不思議な風景がそこには見えた。この風景は言葉では表せない。しかし、自分の気持ちで表すとすれば、「落ち着く」とか「気持ちいい」といったことである。そして木と木の間に入り、目をつぶつたら、夏なのに暑いといった感じもなくすぐ眠れそうな気がした。そこで時間を忘れしばらくゆつくりしていた。

その後、ところどころから見える海の景色を見ながら道をどんどん進んで行く。特になきさの鐘のところから見た海の景色は最高だった。ここは日本の渚一〇〇選にも選ばれているところのこと。

この他にも様々なところを見学して、自分たちの泊る飛島総合センターに帰った。こうして一日目が終わった。一日目が終わった段階で、飛島には海しかないというイメージは消え去った。

そして、二日目。残りのメンバーを迎えるため飛島の高い岩に登りみんなに向かって手を振つた、しかし惜しいことに気がついてもらえなかった。その岩の上から見た空は

本当に澄んでいて青空がいかにも青という感じだった。

その後、残りのメンバーが到着した。そこでグループに分かれて案内が始まった。はじめは、へたくそな案内だったが、次第に慣れてきた。良い経験になった。

その日の夜、島の人に話しを聞いた。そこで、海岸の漂流ゴミの問題や過疎化の問題を生々の声で聞いた。事前このような問題は聞いていたが、やはり現地の人に直接聞くと身近な問題として感じられた。こうして二日目が終わつた。一日目、二日目と過ごして私の手は蚊に刺されてほこぼこになっていた。酒田とは違うのだ。

三日目、四日目と海水浴をしたりサイクリングなどをして飛島を満喫した。そしてついに帰る時間がきてしまった。はつきりいつて帰りたくなかつた。ニュー飛島に乗り、出港し、飛島からどんどん離れていく。なんとなく寂しい気分になった。本当に飛島のこと好きになつていたのである。

そんな気分を変えてくれたのがウミネコの大群だった。このウミネコたちにパンをあげているうちに、酒田の港に到着した。

その後しばらく飛島のタブの林や青く澄んだ海が頭の中を離れることはなかつた。日本には、まだまだ見るべきところ、忘れられているところが沢山あるのだ。手に残つた蚊にさされた痕は、半年の間はあがつていた。

酒田に帰ってから、飛島の抱える問題を真剣に考えて見たいと思った。これはやっぱり飛島を本当に好きになったからだと思う。やはりある場所の問題を解決しようと思うとき、その場所にまずふれて好きになることが重要になってくることを確信させられた。

そして、大学二年の七月、再び飛島に行く機会がやってきた。今回は日帰りでクリーンアップ大作戦という形である。これは飛島の漂流ゴミを拾って海岸をきれいにしようという企画である。参加者はみなボランティアだ。酒田港に到着したとき、あまりのボランティアの多さに驚いた。と同時にこれだけ飛島の問題を真剣に考えている人がいることを嬉しく思った。

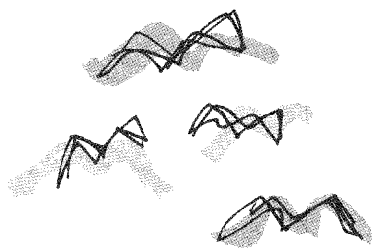
船から飛島が見えてきた。田舎でもないのに不思議と懐かしい気持ちになった。同時に一年前の記憶が蘇った。島に到着し海岸までボランティアの人達と行き、たくさんゴミを拾った。以前話にも聞いていたが、朝鮮半島や他県からのゴミばかりが目立っていた。NPOの方々はゴミの種類を調査して、他県や朝鮮半島などに訴えていられるそうだが、ゴミは一向に減っていない。私としては原因とされる韓国や他県の人々を実際つれてきて、この現状を見せないと問題解決につながらないと思う。

そのようにしてゴミを出すことを抑えていかなければならない。そして、クリーンアップ作戦があたり前ではなく、

このような作戦をしなくてもいいようにしていくことが重要ではないかと思う。

飛島にはすばらしい自然や文化がある。また、たくさん問題がある。これは日本や世界の様々な国も同じことだ。問題を作り出すひとつの責任者は人間であり、また解決するのも人間である。だから、飛島の問題にかんしても、酒田市、そしてその他の人が協力していけばよりよい状態になっていく気がする。その上で、飛島に住んでいる人々の意見を一番に尊重して、よりよい飛島をつくってほしい。その時には、飛島が好きなたりとして協力してほしい。

(東北公益文科大学学生)



離島に、小さな自分が囲まれて

今田 真実

学生、 離島・飛島で考える —二年間の参加と考察—

酒田港から船で一時間半。ウミネコが出迎えてくれる小さな島。飛島は、自分の足だけで一周することができるほどの大きさである。一日あれば余裕だろう。

私は六、七年前に初めて、家族と一緒にこの島を訪れた。その時に最も印象深かったのが海の色と磯の香りである。これまで私の中でイメージとして出来上がっていた、厳しく暗い日本海の色とは違った、吸い込まれるような澄んだ海の色。まるで、ラムネの瓶の中をのぞいているような感覚。それが飛島だった。

その五年後に、仲間たちと再び島に渡ることにになり、これまで五回ほど訪れた。

夏の港につくと、同じ船に乗ってやってきた観光客や、それを出迎える島民たちでにぎわっている。この島での客の移動手段と言えば、自分の足と自転車である。港からは細い舗装道路が伸びていて、その左手に旅館業を営む島民

の軒が並び、右手に海が広がっている。家の前でイカや魚を干す島民とあいさつを交わしながら、なぜだかとても懐かしい気持ちになる。

いつ訪れても、島に着いたその時は、この世界に溶け込むことができるという、ゆったりとした感覚が感じられる。「島に着いたその時は」というのは、限られた日数を島で過ごす私たちの島での生活が、結構、慌しくなるからである。

そのようなスケジュールの中には、時間で区切ることもできない冒険がたくさんある。日常とは違った時間感覚の中で過ごすことになる喜び！

二〇〇一年、仲間たちと初めての夏合宿。私が、すごくよく覚えているのは、仲間と四人で、朝まで起きて、薄暗い道を歩いたことだ。早朝は、空気がひんやりしていて、オレンジ色が濃くなっていく本当に気持ちのいい時間

あつた。

昼間は、汗だくになる暑さだ。その暑さは、娯楽施設のないこの島で唯一の現代風施設といえる、数少ない自動販売機のお茶が売り切れてしまう程だった。

私たち四人の目的地は「テキ穴」だ！ テキ穴は、細く暗い洞窟で、奥は外からは見えないほどの結構な長さがある。中に入ると、一瞬、鳥肌が立つ。人骨が発見されるまでは、冷蔵庫の機能を果たしていた。まあ、肝試しにはもってこいの場といえるだろう。

そんな島の生活の中で、私が、最もとり付かれたのは、島の様々な姿の生き物や植物、そしてそれらが一体となった美しい自然の風景である。飛鳥は、ともかくにも、生き物や植物が好きな私にはたまらない島である。蚊に刺されてかゆい腕をこすり、クモの巣にひっかかりながら、背を低くし、落ち葉を踏みしめ、道なき森を歩いていると、どこかの映画のワンシーンに飛び込んでしまったような気持ちだった。

しかし、前方から、すでに見えない距離にいる呉先生の声がして、そこは紛れもなく、飛鳥という日本の小さな島なのであつた。島で過ごす間、島のことや仲間のこと、何事にも初めての発見の度に感激、であつた。

飛鳥を訪れたことがない人も、少しでもこの感激を感じて頂きたい、また、訪れる機会となることを願ひ、特に印

空気の流れと一体になれる、とても素敵な空間、そして時間の経過だ。

空を見ようとすると、タブの枝が光を求めて隙間なく伸び、屋根をかたち作っている。枝は、互いに重なることがないように、くねくねと陽気な形に曲がって成長している。ケヤキのような、大きく枝を広げる樹木は、私たちに木陰を与えてくれる。このタブの樹は、あたたかい光を残しながら、丸い枝で包み込んでくれる。編んだような屋根の隙間から、ちろちろと差し込む光が温度として感じられる。タブの樹は島のあちこちで見ることが出来る。少し大きなナナカマドのような実は小鳥たちの生命を支えている。

イタドリの林を抜けて、漆に気をつけながら行くと、断崖絶壁。向こうには広い海が広がり、真下をのぞくと岩肌。白波がザブンザブンと打ち付けている。その突出部分がウミネコの繁殖地で、繁殖期にはウミネコの気が立っている。なので決して近づけない場所である。

私たちが訪れたのは、雛が巣立ちをした後であつた。枝を集めた巢の跡があちこちにあり、白骨化したウミネコの死骸も転がっている。ウミネコの死肉は微生物によってきれいに分解されている。すでに異臭はしない。生きることの厳しさと、繰り返される生き物の運命を目の当たりにすることになる。島民は、戦時には危険を冒してもウミネコの卵を採取して食べていたそうだ。ウミネコも人間も、

象深かつた美しい風景をいくつか紹介したいと思う。

まず、荒崎海岸からみる夕日は、暗い海と橙色の夕焼けのコントラストが美しい。ここにくると、皆、同じ方向を向いてしまう。同じ方向を見つめながら、それぞれは何を考えていたのだろうか。

夕日が沈みきらないうちに荒崎海岸を後にする。なぜなら、夕日が沈みきつてしまうと辺りは真つ暗になってしまひ、帰れなくなるからだ。飛鳥では、夜はネオンの明るい都会とは違い、本当に真つ暗なのだ。

次に、アオスジアゲハの群れ。黒地の羽に上品な濃青の模様があり、これが羽を動かすたびに揺れて美しい。公益大近くの飯森山公園でもみることが出来るが、このような群れで見たのは初めてであつた。どうやらヤブガラシの花に一齐に集まり、群れているようだ。ヤブガラシの花はとても小さいから、アオスジアゲハも花のように見える。

島の西側に位置するタブ林は、海岸からわずかに島の内部に入った斜面にある。その斜面の手前は、アオキの幼木が茂つていて、奥に広がるタブの林床はとても美しい。タブの枯葉が何重にも積み重なっている。一面、枯葉色だ。そこ一帯は、植物はほとんど生えていない。足で踏みしめると、フカフカとしたクッションだ。この斜面を上つて、タブの幹に登つたり、寄り添つたり、枯葉の上に座つたり、それぞれが思い思いの場所で、じつと静かなときを過ごす。

生きること、そして子孫を残すことに懸命なのだ。

飛鳥の風景にふれたところで、島民の生活にも触れてみたいと思う。

飛鳥の人々は、自然の産物を多様に利用してきた。それは、食卓にもみることが出来る。海藻や魚、貝などの豊富な海の幸や、はたまた、トビシマカンゾウ（飛鳥 佐渡固有の植物で花を食す）、ヒヨウ（多肉植物の雑草）、畑でとれた野菜（夏はとくにジャガイモがうまい）などの大地の恵みが続々と並ぶ。どれもこれも、美しい風景の中で育まれ、素材そのものの味を最高に楽しめる。格別である。

生活に必要な燃料としては、島のあちこちに茂っているイタドリ（植物）を乾燥させて薪にした。また、島に流れつく流木で漁のための船を造っていたという。小さな島の中で、天然資源が限られている飛鳥にとっては貴重な資源であつたと思う。

現在も、海岸沿いを歩いていると、立派な流木がごろごろ転がっている。私たちは、夏の漂着ゴミ除去のための飛鳥クリーンアップ作戦の準備のとき、これらを使って島の各所に階段を作った。クリーンアップの参加者に高齢の人たちが多いということで、安全面には気を使つたが、環境に影響のあるものは使わず、島にあるものを活用する、ということに十分に気を使った。そこに、そもそもないもの

を持ち込んでしまつては、本来の環境に影響が及ぶことは否めない。しかし、人間の豊かな智慧をうまく使えば、生活に必要なほとんどのことが、小さな島の資源によつてまかなえる。

近年、飛島では人工物の漂着が多い。プラスチックは、もはや私たちの生活には欠かせない素材であるが、鳥や魚たちが飲み込んでしまうと命をおとししてしまうこともある。また、それらを見て見ると、外国語で記載されているものもあり、ゴミは国外からも漂流している。飛島の問題は日本の問題であるし、さらに世界の問題へと結びついている。

飛島が小さな島であることはもちろんだが、日本そのものも島国である。他国と陸地は繋がっていない。しかし、国と国は海や大気と繋がっている。私たちが浴びる日光を注ぐ太陽は、どの国にとつても、一つしかない。また、私たちが食べる食品の多くが海や空を通じて外国から運ばれてきたものである。もの行き来があると、発生する問題も共有しなければならないということである。

飛島の住民は、飛島での自分たちの生活を生き生きと語り、自分たちの生活に誇りを持っているように感じられたけれども、さらに、その陰に見え隠れしている問題についても語り合わなければならないだろう。

自分たちの文化を大切にしたい。文化は、生きるための術が継承されてきたものである。世界があらゆる手段に

よつて繋がった現在、それと同時に、自分以外のすべてのものに対する配慮が必要である。これからの世の中では、これまでそれぞれが継承してきた文化に敬意を払う一方、地球規模の文化を創っていくことが望まれるだろう。

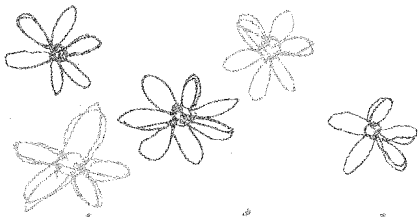
飛島では、訪れる回数が増すと、美しさや感激を一層多く享受するとともに、感じにくかった危機も見えてきた。娯楽のない島にも、一部の快楽の影響が襲来するのだ。

生きることを表現するとすれば、それは、一つの輪に描かれる。輪をかたち造っているものは、一つ一つの細胞までさかのぼることができる。それらとともに、人間が輪の外側に作り出したものもある。それは、最後まで人間が管理をしなければ、輪の中に入りこもうとして、輪に穴をあけてしまう。その危機が、全てのものに迫っている。

ものの根源をたどつてみて欲しい。私たちがこれからも生命をつなげていくためには、自分と他者と向き合い、内側、外側の世界からの並々ならぬ努力と理解が必要である。そうして、自分も世界をかたち作っていることを認識していけるのだと思う。

小さな島が小さな自分の価値を考えさせてくれた。小さな島で感じた大きな価値観を確かめ、育てていきたい。

(東北公益文科大学学生)



伸び行け東北公益文科大―役割は限りなし―	富塚陽一	4
住所録の隣人(II)	佐高 信	6

【特集1】教育と公益

中高一貫教育の現状と取組	伊藤好喜	8
総合学科天童高校の現状と課題	押野良吉	16
総合学科教育と公益思考	中野晃男	25
「さんさん」プランの現状と今後の展望について	鈴木弘康	33
スーパーサイエンスハイスクールの指定を受けて	倉田哲朗	38
学校における英語の日常化を目指して	小林哲郎	47

東北公益文科大学後援会平成十四年度定時総会 記念講演

「お客様志向の企業づくり」―企業と公益―	瀬戸雄三	54
----------------------	------	----

【特集2】学生、離島・飛島で考える―二年間の参加と考察―

心の栄養剤を提供してくれる島	堀米裕子	78
----------------	------	----

飛島の生物探検と海の色	佐藤 翠	80
私を変えた飛島	飯川 忠	82
知恵の息づく島・飛島	五十嵐知佳	84
タブの森を愛する離島案内人	相良 聡	86
離島に、小さな自分が囲まれて	今田真実	89

刊行案内／東北公益文科大学総合研究論集第4号		93
------------------------	--	----

「公益」の碑後日談

インパール・ウクルル・コヒマ	三原容子	94
火葬すれば散骨か？―ニュージーランドに新たな葬送文化を求めて―	高橋英彦	103
	間瀬啓允	111

日本公益学会活動報告		117
キャンパス・インフォメーション		118
公益のすすめV.O.R.2 審査結果／お知らせ		122
寄附・支援者芳名		123